

## 5. 内視鏡業務に臨床工学技士が介入して

社会医療法人財団白十字会白十字病院臨床工学部

○境 大樹、吉岡 健志、岡田 卓也、浦田 英明

### 【はじめに】

当院の臨床工学技士（以下、ME）は、2012年より内視鏡業務に参入しており自身も2015年6月より参入となった。介入当時は洗浄器や高周波の使用前点検、スコープの洗浄、検査や治療の介助、内視鏡機器トラブル時の対応がメインで故障予防などに関してはほぼノータッチの状態であった。2017年の時点で内視鏡担当MEは9名となったが、同年3月にベテラン技士2名の退社。残りの7名全員内視鏡歴3年未満と経験の浅い者のみとなり、その中で内視鏡のセクションリーダーとなった。

### 【目的】

2016年度のスコープ全体の修理金額は過去最高となり、前年度より396%増加であった。また、そのうちスコープ先端系のみ修理金額も過去最高となり、前年度より3317%増加となったため、スコープの故障予防を始めることとなった。

### 【対象、方法】

当院の年間症例数は約3500件でスコープの保有本数は上下部合計で16本となっている。2017年のオリンパスセミナーに参加しME内で勉強会を行うことにより洗浄方法の手技統一を図り、先端保護チューブ™（TmediX社製）を装着することとした。しかし、推奨された運用方法では購入時のコストや手技の煩雑化が考えられるため、スコープを搬送する流れから最も故障リスクが考えられる工程を調査し、上部消化管内視鏡検査前の上部用スコープの待機時のみの使用とした。

### 【結果、考察】

洗浄手技の統一と先端保護チューブ™の使用により、2017年度の修理金額は2016年度より上部用スコープ全体が62%減少。上部用スコープ先端系の故障は16%減少となった。また、2018年度は上部用スコープの修理件数は0件（12月時点）と共に減少した。2017年度に上部用スコープ先端系で高額なCCDの修理があったため、前年度と金額ではあまり差が見られなかったものの改善はされたと言える。また、スコープ全体での修理件数も減少したため、スタッフの洗浄技術の向上も見られたと思われる。

**【結語】**

今回は上部用のみ対策を行ったが、ME介入後の故障件数は上部用、下部用ではほぼ同数であったことから今後は下部用で対策も検討していきたい。